

しながらの楽しい調査だった。

研究所の所報「協同の発見」にも沢山の寄稿をして頂いた。その中の一つレイドロー博士についての文章が特に私は好きである。実際に交わった人でなければ書けない“秘話”の一つだと思う。語彙の乏しい私は、英語のインデックスの校正を毎回大谷さんをお願いしていた。

議論をすると、時として声を荒げる真っ直ぐな考えを好む人だった。気難しさを感じる時もあったが、私のような若輩者の話にも耳を傾け、沢山のアドバイスを頂いた。特に、研究所時代はお会いする機会も多く、余りお酒は強いほうではなかったが、赤ワインが好きで良くご一緒させて頂いた。

そんな大谷さんとの交際も病気をされてからは少ないものになっていた。特に私が昨年センター事業団の仕事をするようになってからは研究集会などでお会いする程度であった。最後に飲んだのは何時だったか。昨年暮れに一度お誘いを頂いたが、時間の都合がつかなかった。今から振り返ると残念でしかたない。協同組合運動にかけては経験と知性があり、情熱の塊のような人だった。私にとってはかけがえのない人であった。

< 大谷正夫氏との思い出 >

富田孝好（セナ-事業団東北事業本部）

大谷さんの悲しい知らせを聞き、本当に残念です。大谷さんとは私が日本労協連・事務局長として勤務をしていた時のことが思い出されます。特に思い出として残っているのは、2度の海外出張でごいっしょした時のことです。1回目は1999年の秋に日本労協連・20周年記念ツアーでごいっしょした時、2回目は2000年の春にICAアジア・太平洋地域総会でごいっしょした時です。

20周年記念ツアーでは、同年が国際高齢者年の年でもあり、IFA（世界高齢者団体連盟）の第4回の世界大会に出席し、同行した仲間とともに大変お世話になったこと。また、そのツアーでは大谷さんのご尽力により、ビクトリア大学のマクファーソン教授との懇談の場が設定され、教授より貴重なお話しを聞く機会を得ることができました。また、ICAのアジア・太平洋地域総会では1週間にわたるシンガポール滞在中、国際会議初出席の私にいていねいにいろいろなことをアドバイスしていただき、感謝の念でたえませんでした。帰国後も報告レポートをまとめる作業にもいろいろお手伝いいただきました。

このような大谷さんとのお付き合いの中

で、しばらしい語学力と国際舞台においても、広い人脈をお持ちの大谷さんに本当におどろきました。そんなご縁から、私にとっての「相談役」であり、「グチ」を聞いていただくことも含めて、大変親しくさせていただきました。研究熱心な大谷さんは、IFA世界会議で報告されたユニバーサル・デザインにも関心をもたれ、ごいっしょに研究会にも参加をし、いっしょに学ぶ機会も私自身持つこともできました。

大谷さん、本当にさびしい気持ちでいっぱいです。私は昨年より新たな任務ということで、東北・仙台の地に赴任しておりますが、東京に帰った時に大谷さんといっしょに食事をしながらお話しができることを楽しみにしていました。本当に残念です。もっともっと長く生きて私たちに貴重な助言をいただきたかったです。しかし、いつまでも悲しんでばかりいてもいけないのですよね。大谷さんとの出会いの中でいろいろ教えていただいたことを糧として、労働者協同組合・日本の協同組合運動の発展・前進のため決意を新たに頑張りたいと思います。どうぞやすらかにお眠りください。さようなら、大谷さん。

